ふみの八十八年

早坂ふみ

時の灯り

制作見本

制作見本

この冊子は「時の灯り」の制作見本です。

人物とお話は架空で、写真はすべてAIで生成しています。

全24頁のうち、表紙と10頁を抜き出しました。

ご注文の冊子では、お客様の写真とお話を使います。

ふみの八十八年

早坂ふみ



令和八年、自宅で。

目次

はじめに …… 三
一　山あいの町 …… 四
二　母の着物 …… 六
三　十五の春 …… 八
四　借りものの花嫁衣裳 …… 十
五　夜のミシン …… 十二
六　断った日 …… 十四
七　娘の衣裳 …… 十六
八　二人の旅 …… 十八
九　がたつかない台 …… 二十
十　いまも、毎朝 …… 二十二
年譜 …… 二十三

薄い字の章は、この見本には入っていません。

はじめに

この冊子は、早坂ふみさんが質問票に書いてくださった答えと、ご家族が録音したお話をもとにまとめました。

言い回しは、できるだけご本人のままにしてあります。順番は、生まれた年から今日までの流れに沿って並べ直しました。

最初にお願いしたとき、ふみさんは「話すほどのことなんて、何もないよ」とおっしゃいました。そのお話が、十の章になりました。

令和八年十一月　　時の灯り

一　山あいの町

生まれたのは昭和十三年、宮城の山あいの町です。町といっても、家のまわりは田んぼと桑畑ばかりで、いちばん近い店まで、子どもの足で三十分かかりました。

五人きょうだいの、まんなかです。上に兄と姉、下に妹と弟。まんなかというのは損な役まわりでね。上の二人には言い負かされるし、下の二人には譲らなければならない。そのかわり、だれも見ていないところで、好きなことができました。

家は茅葺きで、冬は土間まで冷えました。朝いちばんに起きるのは母で、かまどに火を入れる音で目がさめる。わたしは布団の中で、その音を聞いているのが好きでした。

一枚だけ、家族そろって写した写真があります。旅まわりの写真屋が村に来た日に、家の前で撮ってもらったものです。父は一張羅の着物を着て、母は生まれたばかりの妹を抱いています。末の弟は、まだ生まれていません。わたしは三つ。まぶしくて、しかめっ面をしています。

写真屋さんが「動かないで」と言うものだから、みんな息まで止めてしまって。できあがった写真を見たら、だれも笑っていない。



昭和十六年ごろ、家の前で。前の列のまんなかが、わたし。

母は「うちは、まじめな顔の家だ」と言って笑いました。

その写真は、長いこと仏壇の引き出しに入っていました。

二　母の着物

戦争が終わった年、わたしは七つでした。

山の町に空襲はありませんでしたが、物はなんにもなかった。着るものは兄や姉のおさがりで、つぎを当てて着ていました。新しい布など、どこにも売っていません。

その年の秋、母がたんすから自分の着物を出してきました。紺の絣です。嫁入りのときに持ってきた、数少ない着物の一枚だったと、あとで知りました。

母は縁側に座って、その着物をほどきはじめました。糸を一本ずつ抜いて、布を一枚に戻していく。わたしは横で、抜いた糸を指に巻いて遊んでいました。

「なにを作るの」と聞いたら、「おまえの服」と言う。

型紙なんてありません。母はわたしを立たせて、布を肩に当てて、目で寸法をとりました。それから三晩、夜なべをして縫っていました。

できあがったのは、丸い襟のついた半袖の服です。うれしくて、はじめて着た日は、用もないのに近所を一周しました。裾のつぎは、その年のうちに木にのぼって破いたあとです。

いま思えば、あれが、わたしが最初に見た「仕立て」でした。



母が着物をほどいて縫ってくれた服。令和八年に撮影。

一枚の着物がほどかれて、別のものに生まれかわる。それを、七つのときに母の手もとで覚えました。

その服は、いまも、たんすにあります。

六　断った日

子どもが三人とも、小学校に通っていたころの話です。

仕立ての仕事は、家の一間でしていました。近所の奥さんがたが、布を持って訪ねてくる。入学式の服、七五三のワンピース、ご主人の背広の直し。口づてで、お客さんは少しずつ増えていきました。

ある日、駅前の洋品店のご主人が、うちに来ました。店の二階が空いている、そこで仕立ての店を出さないか、という話です。

ありがたい話でした。自分の店を持つのは、十五で町を出たときからの夢でしたから。

その晩、正男に話しました。あの人は「おまえの好きにしろ」としか言いません。昔からそういう人です。

三日、考えました。

店を出せば、朝から晩まで店にいることになります。子どもたちが学校から帰ってきたとき、家にはだれもいない。



昭和五十年、玄関で。

わたしは、あの子たちが玄関の戸を開けて「ただいま」と言うときに、「おかえり」と言える場所にいたかった。ミシンの音がしている家に、帰ってこさせたかった。

四日目に、お断りに行きました。ご主人は「もったいない」と言ってくれました。

もったいなかったのかもしれません。でも、後悔したことは一度もありません。

この写真は、そのころに撮ったものです。学校から帰ってきたところを、玄関で。

年譜

昭和十三年		宮城の山あいの町に生まれる
昭和二十年	七歳	終戦。母が着物をほどいて服を縫ってくれる
昭和二十九年	十五歳	中学を出て、仙台の洋裁店に住み込みで入る
昭和三十七年	二十四歳	大工の正男と結婚
昭和三十九年	二十六歳	長女が生まれる。続いて長男、次女
昭和四十七年	三十四歳	自宅の一間で、仕立ての仕事を続ける
昭和五十年	三十七歳	店を出す話を断る
平成二年	五十二歳	長女の花嫁衣裳を縫う
平成十一年	六十一歳	夫婦で、はじめての旅
平成二十七年	七十七歳	夫・正男を見送る
令和五年	八十五歳	ひ孫の産着を縫う
令和八年	八十八歳	米寿。いまも毎朝、ミシンの前にすわる

ふみの八十八年

令和八年十一月　発行

語り　早坂ふみ

聞き書き・制作　時の灯り（凪WORKS）

この冊子は制作見本です。人物とお話は架空で、写真はすべてAIで生成しています。